はじめに押さえておきたい

バロック・ダンスの基本的なテクニック

バッハの舞曲には、思わずステップを踏みたくなるメヌエットやガヴォットがあります。その一方でダンスからは離れ、器楽曲として様式化された作品もありますが、ダンスを知ることはきっと演奏表現のアイディアを豊かにしてくれるでしょう。「舞曲は踊る」……そうありたいと願っています。

文—浜中康子
(P8-24 ※ P20コラムを除く)

はまなか・やすこ◎桐朋学園大学ピアノ科卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科修了。ピアノ演奏活動とともにバロック・ダンスの研究、公演活動を行う。主な著作に『栄華のバロック・ダンス』、DVD『宮廷の華／バロック・ダンスへの招待Ⅰ・Ⅱ』(音楽之友社)がある。現在、国立音楽大学、桐朋学園芸術短期大学他講師、東京バロックダンス研究会主宰。

写真—ヒダキトモコ (P8,10,13,16)

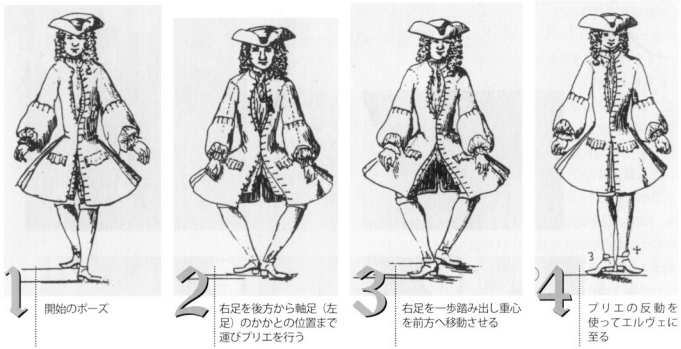
バッハとダンスとの出会い

バッハは15才から17才(1700〜1702)まで、リューネブルクの聖ミカエル教会の聖歌隊員でしたが、声変わりのため、美しいボーイソプラノとしての活躍ができなくなって以降も、ヴァイオリンやヴィオラ、オルガン奏者として役立つ貴重な存在として解雇されることはありませんでした。

そして、ミカエル教会がもつ貴族の子弟のための学校(騎士学院)での音楽奉仕を通して、フランスの大作曲家・リュリの弟子であるダンス教師(トマ・ド・ラ・セル)と出会い、本場のフランス音楽や宮廷舞踏を強烈な印象とともに吸収できる機会を得ました。騎士学院はフランス語が必修であり、ド・ラ・セルはフランスの舞曲をヴァイオリンで演奏し、ダンスを教えていました。そして、彼はミニチュア・ヴェルサイユとも称されたリューネブルクの郊外にあるツェレの、宮廷楽団員でもあり、ここへもバッハを同行させました。これらの経験が、バッハの舞曲の中に生きたリズムとして開花したのでしょう。

様々な舞曲の特徴をとらえる上で重要なポイントとなる、バロック・ダンスの動きの根幹とも言うべきテクニックについて、まず説明しましょう。

図1 ドゥミ・クペによるムーヴマン



動きのアクセントと音楽のアクセント

ダンスのステップを形成する最も基本的で重要な動きは、プリエとエルヴェです。

プリエ……ひざを曲げること

エルヴェ……プリエの状態から、ひざを伸ばすこと(通常は、かかとを上げる動作をいう)

プリエからエルヴェへの一連の動作を、バロック・ダンス用語で「ムーヴマン」と呼び、通常は音楽上の1拍目(強拍)と一致する動きのアクセントを生み出す重要な動きです。主に二つの方法があります。

1) ドゥミ・クペ(一歩踏み出す)によるムーヴマン

下から上方へ働くエネルギーが生み出すアクセントで、ドゥミ・クペの到達点(両脚がエルヴェの状態)が音楽上の1拍目と一致する。(**図1**)

2) 跳躍によるムーヴマン

跳躍のステップは、プリエによって収縮されたエネルギーが上方向に拡散され(空中に至るまでのエルヴェ)、バウンド感のある柔軟な着地をした瞬間が、音楽上の強拍と一致する。

ステップ記号について

バロック時代の舞踏譜に用いられた記譜法ではなく、ここではステップにおける動きの質のイメージに重点を置き、楽譜に対応させる上で適切な方法として、現代の音楽学者M.リトルのステップ記号を用います。

∨	プリエ
∧	エルヴェ
|	パ・マルシェ(エルヴェで歩くこと)
∩	ソテ(跳躍)
∨∧	ムーヴマン　ドゥミ・クペ
∨∩	ムーヴマン　跳躍

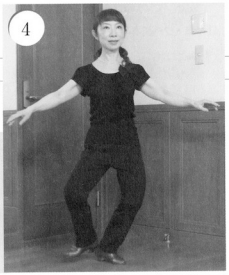
＊ダンス用語のスペル表記は、当時のダンス教師の著書に基づくものとして、現代表記とは異なる場合があります。

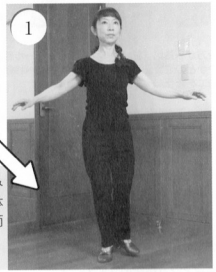
図解！

ブレの踊り方 Bourrée

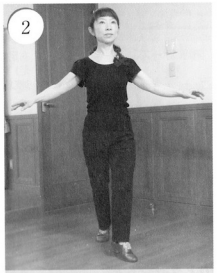
1 2 3 4

アウフタクトから始まる。プリエ（ひざを曲げる）し、軸足のかかとに反対の足のかかとを付ける。

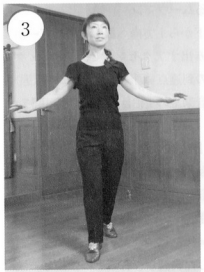




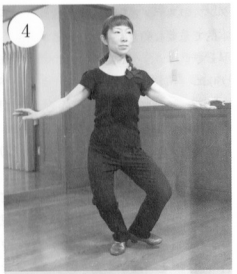
かかとに付けた足を前に踏み出し、つま先から着地して体重をのせ、エルヴェする。（両足のひざを伸ばす）



パ・マルシェ（後ろの足を前に踏み出し、つま先で着地する）



反対の足でパ・マルシェ。



プリエし、後ろの足のかかとを、前の軸足のかかとに運ぶ。

ブレ Bourrée

ブレの特徴
陽気で軽やかなダンス

ブレの音楽は2拍子系で、音楽的なリズムは比較的単純明快です。18世紀において、理論家もその特徴を「陽気な」「喜びに満ちた」などと形容し、気楽に軽やかに演奏されると述べています。舞曲<ブレ>の固有のステップにパ・ド・ブレ（厳密な正式名称はフルレ）があり、4拍で構成されています（**図2**）。

演奏へのヒント
ビートとパルスの拍感を大切に

〈アウフタクトから第1拍へ〉

図2　ブレ・ステップ（Pas de Bourée　パ・ド・ブレ）

¢	&	1	&	2	&
	4	1	2	3	4
	v	∧	|	|	v
	プリエ	エルヴェ	パ・マルシェ	パ・マルシェ	
	パ・ド・ブレ				

譜例1（**譜例2**も同様）に見られるように、ブレはアウフタクトの音から始まり、まさにプリエから1拍目に向けて、エルヴェへスッと上方向に伸び上がる動きが示されています。**譜例1**では、F♯→D（右手）、F♯→D（左手）、E→D（左手）、E→D（右手）と両声部のムーヴマンが、交互に軽快に繰り返される動きを感じ、演奏してみましょう。

もう少し詳しくムーヴマンの動きを見てみましょう。写真（P.10 ブレの踊り方）や**図1-③**の絵が示すように、一歩踏み出してつま先が床についた時、膝はまだ伸びていません。一瞬、両脚がプリエの状態があってから伸び上がる動きは、バロック・ダンスのテクニックに特有のものであり、体はアンダーカーブ（下から上へのカーブ♪）を描いてエルヴェに至ります。まさに音楽上威厳があり、力強さをもつ第1拍の音質を視覚化していると言えるでしょう。強拍（第1拍）の音質は、音の強さだけでなくエネルギーの方向性をイメージしてみましょう。

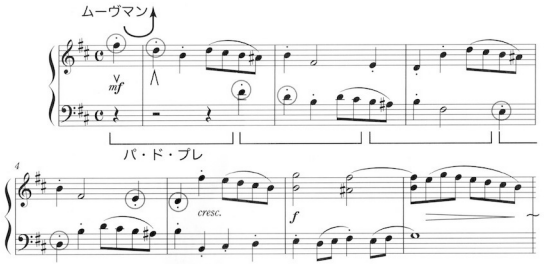
〈ステップは何音符を踏んでいる？〉

17～18世紀の音楽理論家が提唱した舞曲の指揮法に関する理論に「メトリック・レベル」があります。2/2拍子のブレでは、**図3**のような3段階の拍の構造を持っています。

この中で、ダンスのステップは、装飾的ステップを除いて、ビート（2分音符）とパルス（4分音符）の段階にだけ当てはめられ、パ・ド・ブレは、パルスの4分音符を踏んでいます。**譜例2**では、8小節目から左手にパルスの拍が登場しますが、8分音符の音型が主体の曲は、ついついその細かい音を正確に弾くことばかりに集中してしまうのではないでしょうか。さらに、舞曲の演奏では、テンポが乱れないように！……ということも、指導のポイントかと思いますが、これはメトロノームに合わせて練習することによって解決できることではないと感じています。

つまり、多様な音型の中で乱れずにキープしなければいけないのは、ステップが当てはめられるビート（2分音符）と、パルス（4分音符）のレベルであり、タップ（8分音符）が最優先事項ではない、ということです。メトリック理論には「優れた指揮者は、タップのレベルを振ったりはしない。」と記されています。舞曲に生命を与えるリズムは、ダンス・ステップの当てはめられる一番大きな枠組みとなるビート、そしてそれを土台に分割されたパルスによって作られると言えます。ビートとパルスの拍感を感じながら演奏してみましょう。タップレベルの8分音符は軽やかに、スムーズに動くことにつながると思います。

譜例1　W.F. バッハ《プレ ロ短調》



譜例2　バッハ《イギリス組曲第2番》より〈プレ〉

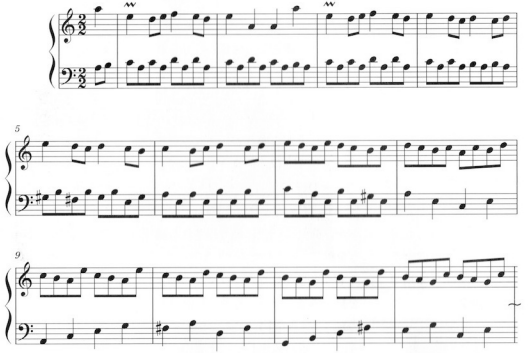
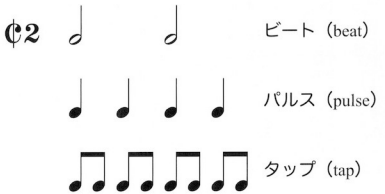


図3　2分の2拍子の「メトリック・レベル」



メヌエット Menuet

メヌエットの特徴

優雅で格調のあるダンス

メヌエットは宮廷舞踏の花形として、1世紀以上にも渡って踊られた代表的なバロック・ダンスです。1660年代にフランスの宮廷に登場し、ダンス教師や踊り手たちを通して、イギリス、ドイツ、イタリアをはじめとするヨーロッパ中の宮廷で流行しました（**資料**）。

メヌエットのステップは、1種類ではありませんが、いずれも6拍（2小節で1セット）で構成されています。メヌエットの楽譜の拍子記号は、通常3／4拍子ですが、バロック時代のダンス教師による舞踏譜には、6／4拍子で記されているものが多くあります。

さて、**譜例3**と**譜例4**に、このステップを照らし合わせてみましょう。6拍の中に、動きのアクセントをもたらすムーヴマンが2回起こります。**譜例5**からもわかるように、ステップのアクセントは、1小節目の第1拍においては音楽上のアクセントと一致していますが、2小節目に一致は見られず、音楽とダンスとの間にクロス・リズム（リズムの異なる声部が同時に演奏されること。アクセントがずれている場合、ポリメトリックともいう）が起こっています。このようなクロス・リズムは、音楽とダンスとの関わりの中で緊張感を生み出す重要な働きをしています。つまり、両者のアクセントが常に一致しているよりも、クロス・リズムがある方が相互の関係は一層生き生きとしたものになるのです。

資料：ダンス教本に掲載された舞踏会用メヌエットの舞踏譜（英トムリンソン 1735）

演奏へのヒント

ムーヴマンやノンレガート奏法を意識しよう

〈ベースラインこそステップ！〉

まず重要なのが、ベースライン（左手）です。ステップを踏んでいる拍は4分音符（パルス）であり、右手で刻まれる8分音符ではありません。

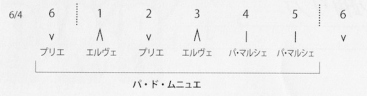
メヌエットの本質的な拍子感が6拍子といっても、小節線によって3拍子ずつ、2小節に区切られています。ダンス教師P.ラモーは、メヌエットのステップを指導する際、1小節目の第1拍で腕を振り下ろし、2小節目の第1拍で振り上げるように指揮をすることを記しています。6拍中、最も重きの置かれる第1拍と、それに比べてクロス・リズムによる二義的な第4拍の質の違いを感じながら、ベースラインを何度も弾いてみましょう。

〈ノンレガート奏法〉

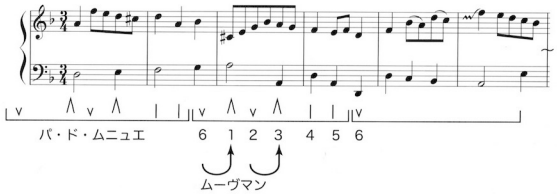
その時、もう一つ意識したいのがノンレガート奏法です。ステップは「姿勢良くひざを伸ばし、かかとを上げてつま先で歩くこと」と「プリエ」との組み合わせですが、すり足になったり飛び跳ねたりせずにスムーズに、まさしくエレガントに歩を進めることが大切です。その時のつま先の感覚とベースラインの音質（音の切れ具合）の一体感が、ノンレガート奏法への一つの手がかりになるかもしれません。

メヌエットは、フランス貴族スタイルを象徴するダンスです。ムーヴマンやノンレガート奏法に留意しつつ、全体の雰囲気は軽快であり、格調のある雰囲気に包まれるように演奏したいですね。

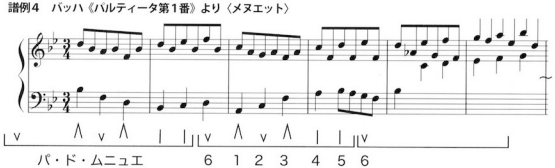
図4　メヌエットのステップ（Pas de Menuet　パ・ド・ムニュエ）



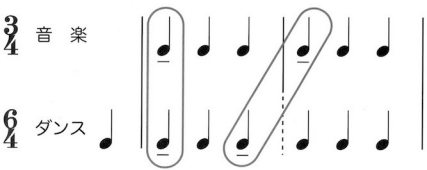
譜例3　『アンナ・マグダレーナ・バッハのためのクラヴィーア小曲集』より〈メヌエット〉Anh.132



譜例4　バッハ《パルティータ第1番》より〈メヌエット〉



譜例5　音楽とダンスにおけるアクセントの違い（クロス・リズム）



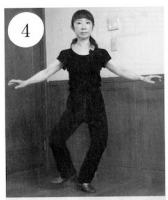
図解！

ガヴォットの踊り方

gavotte

1 2 3

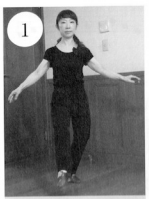
1小節目――コントルタン・ド・ガヴォット



4 プリエ（アウフタクト）

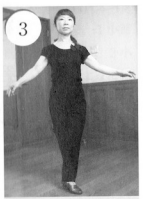
跳躍

小節線



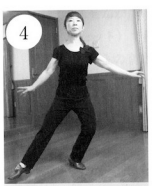
1 軸足で着地し、反対の足を前に出す。

2 前に出した足に体重をのせて、つま先で立つ。（パ・マルシエ）



3 反対の足でパ・マルシエ。

2小節目――パ・アサンプレ

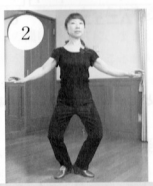


4 軸足と反対の足を横に出し、軸足のひざを曲げる。（プリエ）

跳躍

小節線

1 両足のプリエで着地し、ゆっくりひざを伸ばす。



2

3

ガヴォット

gavotte

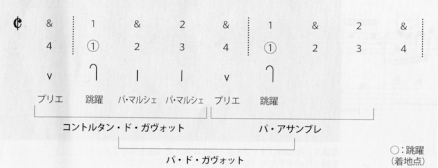
ガヴォットの特徴

跳躍の動きによるアクセント

ガヴォットは、宮廷やパリの華やかな生活に飽きてきた貴族がのどかな田園生活や牧歌的雰囲気に憧れをもった「パストラル趣向」に関連して、1720年代、30年代にダンスとしても器楽曲としても流行のピークを迎えました。バッハもこの時期に数多くのガヴォットを作曲し、中にはミュゼット（バグパイプの一種）の持続低音の響きを思わせる作品もあります。まずステップを紹介しましょう。（**図5**）

パ・ド・ガヴォットは、2種類の跳躍のステップ（コントルタン・ド・ガヴォットとパ・アサンプレ）で構成されており、1回のパ・ド・ガヴォットに2小節を要します。ガヴォットの大きな特徴は、これまでのプレやメヌエットとは異なる、跳躍の動きによるアクセント（ムーヴマン）です。1小節目のコントルタン・ド・ガヴォットも2小節目のパ・アサンプレも、アウフタクト（第4拍）でプリエをし、跳躍して第1拍で着地します。小節線を越えるこの2拍の間に体は空中へ上がります。跳躍をするためには、一歩前へ踏み出すドゥミ・クペとは異なる質のプリエが必要であり、第1拍で着地をした時にはバウンドするアクセントが生まれます。

図5　ガヴォット・ステップ（パ・ド・ガヴォット）



演奏へのヒント

第4拍から第1拍でスペース感とバウンド感を感じよう

〈小節線上で体が空中にいるスペース感〉

譜例6、7を見てもわかるように、ガヴォットは2拍のアウフタクトの後に小節線があります。ダンスにおいて正確に、また生き生きとしたムーヴマンを表現するためには、演奏者がこのアウフタクトの意味をしっかりと認識することが必要です。

ガヴォットを演奏する時、どの音が小節の第1拍なのかを伝えるためにはどうしたらよいでしょうか（**譜例8**）。もちろん音を強くすることによって伝えることもできますが、それに合わせて跳躍するのはあまり心地よくありません。第4拍から第1拍の間に空中にいるというスペース感、そして着地した時のバウンド感を第1拍で表現してこそステップとの一体感が生まれると、私は演奏する立場からも踊る立場からも感じています。

もし、正式なガヴォット・ステップが難しいようでしたら、第1拍で着地するようにその場で跳躍してみてください。跳躍するためには、その前に必ずひざを曲げて（プリエ）、反動をつける必要があることが体感できると思います。アクセントの音質は音量だけでなく、音の方向性や重さ、スピード感など様々な要素によって創られるのではないでしょうか。**譜例7**のように、右手が4分音符二つのアウフタクトではなく、8分

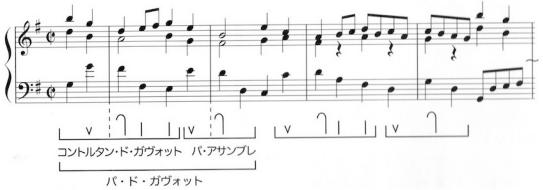
音符に分割された音型の場合は、左手ではっきりと表されているガヴォットのリズムに耳を傾けましょう。

ダンス教師バロンによる《国王のガヴォット》(1716) は、7才のルイ15世のために振り付けられた作品です。今年5月に開催された「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン 2017」の公演で小学生たちが踊りましたが、アウフタクトを聴き取ることのできる音楽性と美しく動く身体性が、当時は幼少の頃から求められた貴族の教養であったことを実感しました。(**写真1**)

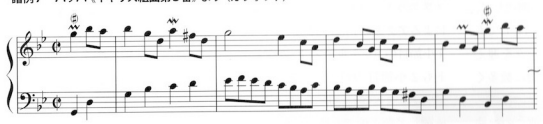
〈前進と後退の動きも取り入れて〉

舞踏譜が残されている作品を見ると、ガヴォット・ステップには前進のステップと後退のステップが続けて登場します。演奏するときに4小節のフレーズの中で、最初の2小節は前進、続く2小節は後退するステップという方向性を意識することも、生き生きと対話するようなフレーズ感につながると思います。

譜例6　バッハ《フランス組曲第5番》より〈ガヴォット〉



譜例7　バッハ《イギリス組曲第3番》より〈ガヴォット〉



譜例8　ガヴォット・ステップと音楽との関係

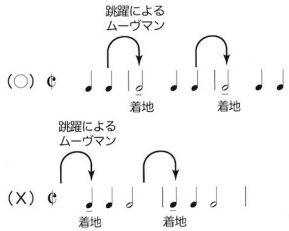


写真1　今年の「ラ・フォル・ジュルネ」で《国王のガヴォット》を踊った小学生たち（位下時子バレエアカデミー生徒）
© team Miura